

2012 年度 第 7 回 全体研究会

「エンゲイジド・ブディズムの潮流」 (第 4 回)

(共催： 龍谷大学 人間・科学・宗教 オープン・リサーチ・センター、龍谷學會)

報告題目 精神科医が語るブータンの＜幸福＞
開催日時 2012 年 11 月 11 日 (日) 19:00－21:00
場所 龍谷大学アバンティ響都ホール
報告者 Chencho Dorji (Jigme Dorji Wangchuk National Referral Hospital)
参加者 97 人

【報告のポイント】

ブータン唯一の精神科医である Chencho Dorji 氏は先進国である日本と最貧国であるブータンの幸福度について述べ、環境的な要因による「幸福」と「真正な心」から生じるそれとの相違について指摘した。さらに氏は、ブータン国王ジグミ・シンゲ・ワンチュクが後者を促進するために創出した「国民総幸福度 Gross National Happiness」という概念の可能性とその限界についても話した。

【報告の概要】

Dorji 氏は最初に、ブータン国民は日本人に対して好意を寄せていると述べた。日本の国民を特徴づけるような弾力性 (resilience)、忍耐力 (perseveration)、決断力 (determination) は、ブータンの国民にとって、モデルとなるべきものであると主張した。

しかし、2011 年 3 月の東日本大震災の際、そういった日本人の弾力性の土台は、ある程度ながら、揺るがされることとなった。震災にともない、日本人の価値観が揺らいだことは仕方ないことであり、日本人は外に出していなくても、心の中で苦しんでいることはわかる。ブータンの国民は、失われた多くの人命のために祈っていると述べ、ブータン人と日本人は学び合うことが多いとも指摘した。

日本は世界の中で、産業がもっとも進んでいる国のひとつで、裕福な国である。それに対して、ブータンは最貧国で、最近になってようやく、近代化を遂げた国である。しかし、日本人は、望んでいるほど幸せでないのに対し、ブータン国民の幸福度は高いという。

幸福 (Happiness) とは、人類すべてが求める普遍的な願望である。しかし、何を「幸福」と呼ぶのか、それは個人によって異なる。宝くじに当たったときに感じるような「幸福」

は、最高のそれであろうか。そこにいつまでも持続する安らぎや満足や幸福はあるであろうか。一般的に、「幸福」には二つの種類があるという。一方は外からの影響によるもの、つまり感覚的、あるいは快楽的な幸福である。他方は個人の心に根差すもの、つまり内なる幸福である。外側からの幸福とは、当人が置かれている環境や条件から生じてくるものであるが、そういった物質的な幸福には限界がある。例えば、日本および西洋諸国を中心とする研究の成果に言及すると、富裕な国の人々は必ずしも、世界の中でもっとも幸福ではないことがわかれると述べた。

それに比べて、内面の幸福というのは、全く純粹で、穏やかである「真正な心」(True Mind)と呼ばれるところから生じるものである。このような幸福は知覚的、感覚的な経験によるものではなく、そのため、外面的な要因によらない幸福である。釈迦は約 2500 年前、我々が一人一人、この真正な心を有していることを説いた。しかし我々が、自らのそういった「真正な心」を認識できないのは、諸条件や、文化的洗脳 (cultural indoctrination) ——それらを「不備のある教育 flawed education」 とも呼ぶ——などのせいであると指摘した。

国王ジグミ・シンゲ・ワンチュクによる「国民総幸福度 GNH」という概念は、心の幸福を促進するための条件を作り出す上でのひとつの方法である。国王は、GNP という概念に、根本的な問題があると判断し、GNH を創出したという。例えば、GNP の枠組みでは、ある国の酒産業による収入などを計ることは可能であろうが、そこから生じるアルコール依存の問題などは考慮しないという。



もちろん、GNH 概念にもそれなりの問題はある、様々な批判もある——例えば、他の諸国に適応できない、または幸福とは象徴的かつ主体的なもので、計ることはできない、など。そもそも GNH は他国に輸出するために創出された概念ではない。しかし、多くの国々がそれに関心を示し、世界に広がりつつある。報告者はさらに、政府や国家的機関は、個人を幸福にすることはできないという——なぜなら、幸福は主体的なものであり、心中から生じるものであるからである。しかしながら、やはり、個人の幸福を促進させるためには、健全な計画や政策を通して、政府は物質的・環境的条件を生み出すべきなのであると主張した。

内なる幸福の概念をより明確にすべく、ブータンの文化状況について考える必要もある。ブータン文化とその国における伝統的な価値観は、仏教（ことに金剛乗 Vajrayāna）の考え方

によって成立したものであり、「因果」、「慈悲」、「業」といった仏教的概念に大きく依存しているのである。報告者は、その仏教の影響を詳細に述べた。報告者はさらに、死の問題について触れ、仏教からの多大な影響を受けたブータンが、それに如何に向き合っているのかについても述べた。

1999年に、携帯電話、テレビ、インターネットなどがブータンに導入され、その通信施設はほとんどすべての村に届いている。それに加え、日本政府がブータンに建てた数多くの橋によって、農業用道路が敷かれ、どのような遠い村までも届いている。日本と深い関係を保ちながら、ブータンはこうして、国民の幸福が促進されるための近代的基盤を築いてきた。しかし、それは国民総幸福の構成要素を念頭においてのことであるという。

【議論の概要】

藤能成氏から次のような質問がなされた——ブータンは近年、急速な近代化を遂げ、テレビやインターネットなどが導入された。ブータンの国民は従来、outer happiness ではなく、inner happiness に重点を置いてきたが、前者を促す物質的なものが近年、数多く輸入されている。そういったコンテキストの中で、後者の基盤は揺るがされているのではないか、そして近代化というものがもたらす独特の諸問題について、ブータンは如何なる対策をとっているのか、と。それに対して Dorji 氏は、これはブータンのみならず、あらゆる発展途上国に対しても問いかねられるものであるという。携帯電話やテレビなどが導入された1999年以降、ブータン、殊にその若い世代は、それまでとは異なる速さで変容してきた。Dorji 氏は、このようなことがあるからこそ、GNH が必要だとする。いわく、キーワードは単なる「発展 development」ではなく、「人間的な価値を踏まえた発展 development with human values」でなければならない。これは、ブータンの大きな目的だ、とのことである。



須賀英道氏は、近年の日本において、食糧事情の変化によって肥満や生活習慣病の問題が悪化しているが、ブータンのそれに関する事情について訊いた。それに対して Dorji 氏は、まだ深刻とはいえないものの、殊に首都のティンブーにおいて、肥満などの問題を抱える人間が現れてきた。一方、第三世界を特徴づける栄養不良や感染症などの問題はいまだに大きく、ブータンは近年、そのふたつの異なる問題に直面せざるを得なくなったと答えた。